

## 青年期の政治意識に関する研究

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 明治大学政治経済研究所<br>公開日: 2009-02-14<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 井田, 正道<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/1854">http://hdl.handle.net/10291/1854</a>                                     |

# 青年期の政治意識に関する研究

井 田 正 道

## I. 問題の所在

わが国における青年の政治意識に関する研究の多くは、大別して次の2つの問題意識から行われてきたようである。ひとつは若年層の低投票率などに表れる政治的無関心の実態や原因に焦点を当てた研究である。この視角による研究は若年層と他の年齢層の政治意識との比較に基づいて考察を進める傾向がある。<sup>(1)</sup> また、アメリカにおける政党衰退に関する研究で知られるワッテンバーグ (M. P. Wattenberg) は、「選挙制度の国際比較調査」から老年層 (65歳以上) と若年層 (30歳未満) との投票率の差について先進10カ国の比較検討を行ない、いずれの国においても若年層の投票率は老年層のそれを下回っていたものの、その差がもっとも大きい国が日本であることを見出している。<sup>(2)</sup> この事実から、わが国の若年層の政治参加の不活発さは特筆すべき事項といえよう。わが国におけるこのような投票率の世代間ギャップは、急ピッチで進行している人口の少子高齢化を考えると、投票者総数に占める高齢層の比率が今後ますます増大することを意味するとともに、若年層の政治的影響力の低下をももたらす。

青年の政治意識研究のもうひとつの視角は、政治的社会化研究の一環としての研究である。政治的社会化とは政治的態度の形成過程あるいはその形成・変容過程などと定義され、正確には一生涯にわたって継続する過程であ

る。しかし、アメリカにおける初期の政治的社会化研究で重視されたライフサイクル上の時期は有権者年齢に達するはるか以前の児童期であり、その時期に形成される政治的態度は成人後の政治的態度の基礎となるという前提が存在していた。<sup>(3)</sup> しかし、児童期に形成された政治的態度が成人期にまで継続するのか否かという問題を残し、その後、青年期～成人初期にわたるパネル・スタディでこの問題を検討しようという試みも加えられた。それ以外にも1960年代後半から70年代初頭にかけてみられた「若者の反乱」や「世代の断絶」という現象も政治的態度の発達過程における青年期の重要性をより一層高めた。<sup>(4)</sup>

青年の政治意識に関する研究は、様々な研究領域からアプローチされているが、政治学者よりも社会学者や心理学者の方が熱心のようにみえる。その理由としては、青年論や発達心理学の視点から青年期の政治意識を研究課題に置く必要性が認められているからであろう。<sup>(5)</sup> それに対して、政治学者は選挙結果を決定する投票行動の研究に熱心であるせいか、選挙権のない未成年層を含む青年層の政治的社会的な研究の蓄積がほとんどみられない。近年では、一般的に政治的社会的なものとは低調であるが、一方で選挙権を18歳に引き下げるべきであるとする主張が次第に広がりを見せており、選挙権年齢引き下げ論の台頭は政治学の立場からも青年層の政治意識を理解する必要性の度合いを以前よりも高めているといえよう。<sup>(6)</sup>

ここではまず、青年期の政治的関心の構造およびその発達プロセスについて考察を加える。政治的関心の発達プロセスに関しては、政党支持態度と同様にライフ・サイクルの長期的なスパンから考察する必要がある、その意味で安定度の高い政治的態度の形式・変容過程の解明を課題とする政治的社会的な研究において重要な位置を占めるといえよう。昨今、問題視されている若者の政治的無関心に関しても、若者の政治化の遅れという観点などから、青年期の政治社会化の実態を解明する必要があるようだ。

また、青年層の政治離れや政党離れについては、しばしば言及されており、昨今の青年が無党派世代であることは明らかである。しかし、通常の世界論調査で最も高い注目度を集める内閣支持・不支持の態度に関しては、20歳代の意識は他の年齢層とほとんど違いが認められないという点は注目されてこなかった。すなわち、「支持政党なし」と回答した若者であっても、内閣支持・不支持の態度は明確に抱いているのである。それでは、その多くが無党派層である若年層は何を手がかりにして内閣に関する態度を形成しているのだろうか。

本研究では、小泉首相に関するイメージ調査を行い、小泉首相に対するイメージと小泉好感度および内閣支持との関係について考察を加える。どのようなイメージが支持につながるのかという観点から分析を行うことによって、わが国において研究蓄積の乏しい政治リーダーへの支持や好感度の研究にも寄与したいと考える。

## II. データ

データの収集は、大学生に対する質問紙調査によった。<sup>(7)</sup> 調査対象は、明治大学学生である。調査時期は2002年6月、調査方法は集合調査法であり、自記式無記名回答方式によって行った。この時期は小泉政権が発足して1年あまりが経過し、同年1月末の田中真紀子外相の更迭騒動の余波もあって、各種世論調査における小泉内閣支持率は発足直後の驚異的な値からはほぼ半減していた時期である。合計649名から有効回答を得たが、ここでは、青年期を10歳代後半から20歳代前半までと考え、したがって25歳以上の学生は分析対象からは除外した。したがって、分析対象となる学生の年齢は18歳から24歳までである。分析対象となったデータの回答者総数は619名である（男426名、女163名）。

### Ⅲ. 研究1 — 政治的関心の分析 —

1950年代末からアメリカで活発化した政治的社會化研究はその後、わが国でも紹介され、いくつかの実証研究も行われてきた。わが国における初期の政治的社會化研究のうち、政治的社會化過程に関する理論化をこころみた論考として『社会学評論』に掲載された直井道子の論文が存在する。

直井は政治的社會化過程で説明したい変数として政治関心と政党支持態度の2つを挙げた。<sup>⑧</sup> このうち、政党支持態度の発達過程に関する研究は今日までいくつか存在するものの、政治関心の発達に関する研究はほとんどみられない。<sup>⑨</sup> 先に言及したように選挙権年齢の引き下げ論が台頭しつつある今日、青年層における政治関心の発達過程の解明は青年と選挙との関わりを論じる上でも重要な研究課題といえる。

政治への関心という場合、何をその構成要素とするかが問題となるが、ここでは大きく分けて、政治あるいは政策領域に対する関心度、政治的コミュニケーション行動、政治知識の3つから構成されるものと考え、本調査では以下の質問項目を設定した。

第1は、政治関心である。これは「あなたは政治に関心がありますか。ひじょうに強い関心がある場合を1、まったく関心がない場合を5として、ご自分がどこに位置するかお答えください」という質問文を設定した。

第2は、政治的コミュニケーション行動である。これに関しては友人との政治的会話の頻度と、メディアにおける政治情報接触頻度を質問した。

第3は、政治知識である。これに関しては、日本の官房長官の名前、アメリカの2大政党の組み合わせ、日本の第3党の名称をそれぞれ選択肢法で回答してもらった。

第4は、政策領域別の関心度である。ここでは、政治倫理・外交問題・憲

法改正・景気対策・年金・税制・行政改革・環境問題の8領域に対する関心度を政治関心と同様に5段階で回答してもらった。

本稿では「政治関心」と「政治的関心」という用語を区別して使用する。「政治関心」よりも「政治的関心」は広義の概念である。

### 1. 政治的関心項目間の関係

政治関心という漠然とした質問に対する回答は、政治的コミュニケーション行動や政治知識とどの程度の相関関係が認められるのであろうか。表1に示すように友人との政治的会話およびメディア接触に関して相関係数は0.4を超えており、強い相関とはいえないがある程度の相関関係は認められる。政治知識（正解数）との相関係数は0.4を下回っており、正の弱い相関にとどまる。

政治関心と政策領域別関心との相関係数が0.4を超えるのは行政改革、政治倫理、外交問題の3個であり、景気対策、税制、環境問題は0.2を下回る。

表1 政治的関心項目間の相関関係(1)

|        | 政治関心   | 友人との会話 | メディア接触 | 政治知識   |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| 政治関心   |        |        |        |        |
| 友人との会話 | .481** |        |        |        |
| メディア接触 | .439** | .339** |        |        |
| 政治知識   | .329** | .217** | .256** |        |
| 政治倫理   | .472** | .357** | .337** | .177** |
| 外交問題   | .445** | .349** | .379** | .235** |
| 憲法改正   | .356** | .262** | .231** | .169** |
| 景気対策   | .196** | .150** | .157** | .048   |
| 年金     | .225** | .150** | .156** | .069   |
| 税制     | .155** | .121** | .131** | .037   |
| 行政改革   | .484** | .352** | .231** | .187** |
| 環境問題   | .149** | .144** | .100*  | .030   |

\*\*  $p < 0.01$  \*  $p < 0.05$

すなわち、学生たちがイメージする政治への関心とは、税制や景気などの生活密着型問題に対する関心度ではなく、行政改革や外交といったマクロな問題や政治家のモラルに対する関心の度合いであるとみなされているのである。この点では、友人との政治的会話やメディア接触もほぼ同様の傾向が認められる。この結果が仮に青年層一般に該当するとするならば、近年における国政選挙の主要な争点である景気や年金といった生活密着型問題は、青年層の政治関心を喚起する争点ではないということになる。

なお、政治関心と政治的有効感との相関係数は .082 であり、また政治関心と政治満足度との相関係数は -.084 であった。<sup>(10)</sup> いずれも相関係数の値は低く、政治に関心をもつことと有効感や満足感との間にはほとんど相関が認められなかった。

政策領域別関心度間の相関関係を表2に示す。相関係数の値が0.4以上の組み合わせは、税制—年金(587)、憲法改正—外交問題(458)、年金—景気対策(448)、税制—景気対策(421)、政治倫理—外交問題(403)、政治倫理—行政改革(402)の6対である。個人の経済生活に関連する年金、税制、景気といったイシューの間でひとつのまとまりが認められる。反対に、相関係数が0.2を下回っているのは、政治倫理—税制、政治倫理—環境問題、

表2 政治的関心項目間の相関関係(2)

|      | 政治倫理   | 外交問題   | 憲法改正   | 景気対策   | 年金     | 税制     | 行政改革   |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 政治倫理 |        |        |        |        |        |        |        |
| 外交問題 | .403** |        |        |        |        |        |        |
| 憲法改正 | .307** | .458** |        |        |        |        |        |
| 景気対策 | .177** | .285** | .267** |        |        |        |        |
| 年金   | .210** | .214** | .289** | .448** |        |        |        |
| 税制   | .095*  | .180** | .259** | .421** | .587** |        |        |
| 行政改革 | .402** | .340** | .324** | .343** | .307** | .376** |        |
| 環境問題 | .155** | .220** | .240** | .197** | .320** | .283** | .275** |

\*\*  $p < 0.01$  \*  $p < 0.05$

青年期の政治意識に関する研究

表3 政策領域別関心に関する因子構造

|      | 因子   |      |
|------|------|------|
|      | 1    | 2    |
| 政治倫理 | .086 | .590 |
| 外交問題 | .150 | .682 |
| 憲法改正 | .257 | .549 |
| 景気対策 | .526 | .259 |
| 年金   | .732 | .179 |
| 税制   | .783 | .090 |
| 行政改革 | .372 | .486 |
| 環境問題 | .349 | .257 |

政治倫理—景気対策，外交問題—税制，景気対策—環境問題の5対である。生活密着型問題と生活非密着型問題との組み合わせが多い。

政策領域別関心度に関して因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行ったところ，固有値1.0以上で2つの因子が抽出された（表3）。第一因子においては税制，年金，景気対策が高い値を示すことから，生活密着型領域の因子といえる。第二因子は，外交問題，政治倫理，憲法改正，行政改革が高い値を示すことから，生活非密着型問題の因子といえる。さきに表1に関して検討したように，学生にとって政治関心とは生活非密着型問題に対する関心度のことをイメージしているのである。これは，学生たちがまだ社会に出ていないことと大きく関係していると考えられる。

その他，政治関心度および政策領域関心度と支持政党の有無との関係を検討した。党派心の保有と政治的関心とは双方向の関係にあると考えられる。すなわち，政治関心が高くなることが，党派心の保有に結びつくとともに，党派心の保有もまた政治的関心を高める作用がある。投票行動研究において，党派心の保有は投票参加を促進することも判明していることから，それが政治的関心の1つの指標としての役割も果たす。表4には，関心度別の支持政



表4 政治的関心と支持政党保有率

|      | 高 ← 関 心 度 → 低 |      |      |      |      | 回帰係数  |
|------|---------------|------|------|------|------|-------|
|      | 1             | 2    | 3    | 4    | 5    |       |
| 政治関心 | 39.8          | 22.4 | 12.4 | 5.1  | 3.6  | -8.97 |
| 政治倫理 | 25.0          | 27.3 | 16.4 | 17.8 | 8.6  | -4.23 |
| 外交問題 | 24.8          | 18.6 | 12.6 | 13.0 | 16.0 | -2.32 |
| 憲法改正 | 28.0          | 18.6 | 12.1 | 11.7 | 16.7 | -2.95 |
| 景気対策 | 22.5          | 15.0 | 17.2 | 18.9 | 21.1 | 0.11  |
| 年金   | 22.4          | 19.2 | 15.8 | 16.0 | 20.0 | -0.80 |
| 税制   | 22.0          | 19.9 | 16.3 | 16.9 | 9.5  | -2.80 |
| 行政改革 | 28.9          | 25.3 | 14.8 | 10.8 | 7.1  | -5.81 |
| 環境問題 | 21.5          | 17.8 | 18.2 | 20.5 | 12.5 | -1.53 |

党保有率および回帰係数を示す。回帰係数はマイナスの数値が高いほど関心度による支持政党保有率に違いがみられることを意味する。

結果を検討すると、支持政党の有無に関しては、政治関心度に比して政策領域別関心度との関係が弱いことがわかる。特に、年金、景気対策、環境といった生活密着型問題への関心度と支持政党の保有率との関係を示す回帰係数の絶対値は低く、これらの問題に対する関心の高低と党派心の保有との関係はほとんどみられない。政策領域項目の中で回帰係数が比較的高い項目は、行政改革と政治倫理という生活非密着型問題であり、生活密着型問題に関心をもつことと、党派心の保有とは次元が異なるといってもよい。また、マクロの問題の1つである外交問題も回帰係数の値が低く、外交問題に関してもほぼ同様のことがいえる。

## 2. 政治的社会化

政治的関心の発達過程については、わが国ではみるべき業績がない。政治的社会化の主要な担い手としては家族や学校などが挙げられるが、政党支持態度の発達に関しては家族の重要性が繰り返し指摘されている。政治的関心

青年期の政治意識に関する研究

表5 家族との政治的会話と政治的関心項目との相関

|           |        |
|-----------|--------|
| 政治関心      | .354** |
| 友人との政治的会話 | .293** |
| メディア接触    | .286** |
| 政治知識      | .183** |
| 政治倫理      | .287** |
| 外交問題      | .228** |
| 憲法改正      | .170** |
| 景気対策      | .083*  |
| 年金        | .073   |
| 税制        | .080*  |
| 行政改革      | .274** |
| 環境問題      | .043   |
| 政治的有効感    | .195** |
| 政治満足感     | .019   |

\*\*  $p < 0.01$  \*  $p < 0.05$

の発達過程においても同様に家族は重要な社会化の担い手であろう。そこで、ここでは家族の政治的会話の頻度と関心度との関係を検討していく。本調査では小中学生の頃の家庭での政治的会話の頻度を「しばしばあった」を1とし、「まったくなかった」を5として5段階で回答してもらった。単純集計結果では、4あるいは5と回答した者が合わせて55.5%に達し、家庭における政治的会話の少なさを表していた。

表5には政治的関心項目と家庭での政治的会話の頻度との相関係数を示す。相関係数が0.2以上の値を示すのは政治関心 (.354)、友人との政治的会話 (.293)、メディア接触 (.286)、政治倫理 (.287)、行政改革 (.274)、外交問題 (.228) である。すなわち、これらの項目については、家庭での政治的会話の頻度との弱い相関関係が認められる。反対に、政治満足感と、環境問題・年金・税制・景気対策への関心度との相関はほとんどみられず、これらの項目に関しては家庭の政治的会話の頻度は影響を及ぼしていないといえる。政策領域別に検討すると、生活密着型問題への関心度は初期社会化過程にお

表6 年齢と政治的関心項目との相関

|           |        |
|-----------|--------|
| 政治関心      | .140** |
| 友人との政治的会話 | .139** |
| メディア接触    | .204** |
| 政治知識      | .179** |
| 政治倫理      | .105** |
| 外交問題      | .156** |
| 憲法改正      | .121** |
| 景気対策      | .045   |
| 年金        | .101*  |
| 税制        | .066   |
| 行政改革      | .081*  |
| 環境問題      | .008   |
| 政治的有効感    | -.037  |
| 政治満足感     | -.080* |

\*\*  $p < 0.01$  \*  $p < 0.05$

る家庭での政治的会話の頻度にほとんど左右されないのであり、家族以外の社会化の担い手の重要性が推測される。それに対して、弱い相関ではあるが、政治関心・政治的コミュニケーション行動および政治倫理、行政改革、外交問題といった生活非密着型問題への関心の形成過程における家庭の重要性が認められる。

次に年齢と政治的関心項目との相関分析から大学時代における政治的関心度の発達について考察を加える。表6には、年齢（1歳刻み）と政治的関心関連項目との相関係数を示す。年齢が1歳刻みであるため、相関係数の値は総じて低いものの、政治的有効感と政治満足感を除いたすべての項目で正の値となっており、全般的に年齢の上昇とともに政治への関心度が高まりつつあることを表している。1%有意水準をパスした7個の項目を相関係数の高い順に並べると、メディア接触（.204）、外交問題（.156）、政治知識（.179）、政治関心（.140）、友人との政治的会話（.139）、憲法改正（.121）、政治倫理

(105)となる。それに対して環境問題、景気対策、税制といった生活密着型問題は相関係数が低く、5%有意水準をパスしていない。この結果から、生活密着型問題への関心については、大学生時代にはほとんど関心度が上昇しない領域といえる。裏返していえば、大学時代に関心が発達する領域は生活とは関係の薄いマクロ的領域である。

### 3. 結 論

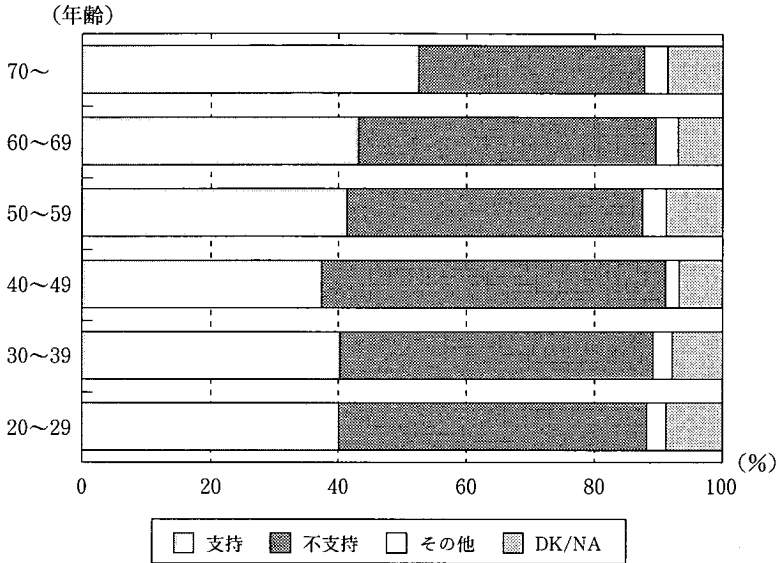
これまで、大学生の政治的関心に関する分析を行ってきた。分析の結果から導くことができる結論は以下のとおりである。

- ① 税制、年金、景気対策という生活密着型問題への関心と、外交問題、政治倫理、憲法改正、行政改革という生活非密着型問題への関心という因子が抽出された。
- ② そして、政治への関心という場合、生活非密着型問題への関心との相関関係は認められるが、生活密着型問題への関心度との相関はほとんどない。
- ③ 小中学生時代における、家庭での政治的会話はマクロ領域への関心度を高める役割を果たすが生活密着型のミクロな領域への関心はほとんど高めない。
- ④ 大学生時代に加齢とともに政治関心や政治的コミュニケーション行動が発達する。政策領域別関心度に関しては、マクロ的問題への関心度は高まるが、ミクロ的問題への関心度はほとんど高まらない。また、政治的有効感や満足感も上昇しない。

## IV. 研究2 — 小泉イメージの分析 —

若年層の選挙離れや政党離れはつとに指摘されてきた事実であるが、内閣

図1 年齢別内閣支持 (2002.6: 読売新聞世論調査データ)



支持に関する態度は中高年層とほとんど差がないという事実に対しては、学問的関心が払われてこなかった。一例として、本調査と同月の2002年6月に実施された読売新聞社の全国世論調査結果を図1に示すと、20歳代の内閣支持に関する態度分布は全体のそれと近似値を示しており、DK・NA層の比率も他の年齢層とほとんど変わらない。すなわち、定期的な世論調査において最も注目度の高い政治的態度である内閣支持率に関しては、意見の分布をみる限り、青年期までに意識は十分に発達しているといえる。ただ、従来の世論調査でみられた支持率の時系列的推移などからわかるように、内閣支持に関する態度は政党支持態度に比して不安定な態度であり、時々状況に大きく左右される。また、一般に政権の存続期間は政党の存続期間よりも短い。したがって、安定的な態度の形成・変容プロセスの解明を課題とする政治的社会化研究にはそぐわない態度ということも可能である。しかしなが

ら、首相イメージと内閣支持との関係を理解することは、政治的リーダーに関わる有権者の意識構造の理解に寄与することから、長期的な政治意識の形成・変容過程を解明する上においても意義が存在すると考える。

内閣支持・不支持の態度は政策に対する評価や期待の他に、首相や内閣全体に対するイメージが一定の影響を及ぼしていると推測される。特に、小泉政権においては、支持率の動向は株価などの連動性はみられず、2002年6月までの時期における支持率の大変動は小泉人気を二人三脚で支えてきた田中真紀子外相更迭（2001年1月）による急降下がみられたのみであった。したがって、調査時点までの小泉内閣への支持は多分に政策あるいは業績に基づく「支持」というよりも、小泉首相の掲げる「構造改革」という大枠の方針に対する支持という部分と、小泉首相個人に対する好意的イメージに基づくものと考えた方がよさそうである。とくに生活と政治との関わり感が薄い大学生においては、内閣支持・不支持を規定する要因として首相イメージの重要性は大きいと考えられる。

それでは、どのようなイメージが小泉首相に対する好感あるいは小泉内閣への支持に結びついているのであろうか。まず、本調査における内閣支持と小泉好感度に関する質問文と単純集計結果を次に示す。

〈内閣支持〉

Q. あなたは小泉内閣を支持しますか。

1. 支持する (11.5%)
2. どちらかといえば支持する (29.6%)
2. どちらともいえない (24.1%)
4. どちらかといえば支持しない (15.4%)
5. 支持しない (19.4%)

〈小泉好感度〉

Q. あなたは小泉首相に好感をもっていますか。

1. 好き (9.0%)
2. やや好き (24.4%)
3. 好きでも嫌いでもない

(38.6%) 4. やや嫌い (14.9%) 5. 嫌い (13.1%)

また、小泉イメージに関する項目については、SD法により、以下の項目を設定し、こちらも5段階で回答してもらった。

〈評価的イメージ項目〉

決断力がある—決断力がない

判断力がある—判断力がない

情熱がある—情熱がない

理念がある—理念がない

実行力がある—実行力がない

指導力がある—指導力がない

説得力がある—説得力がない

〈人格的イメージ項目〉

強い—弱い

暖かい—冷たい

明るい—暗い

きれい—きたない

親しみがもてる—親しみがもてない

革新的—保守的

柔軟である—柔軟でない

誠実である—誠実でない

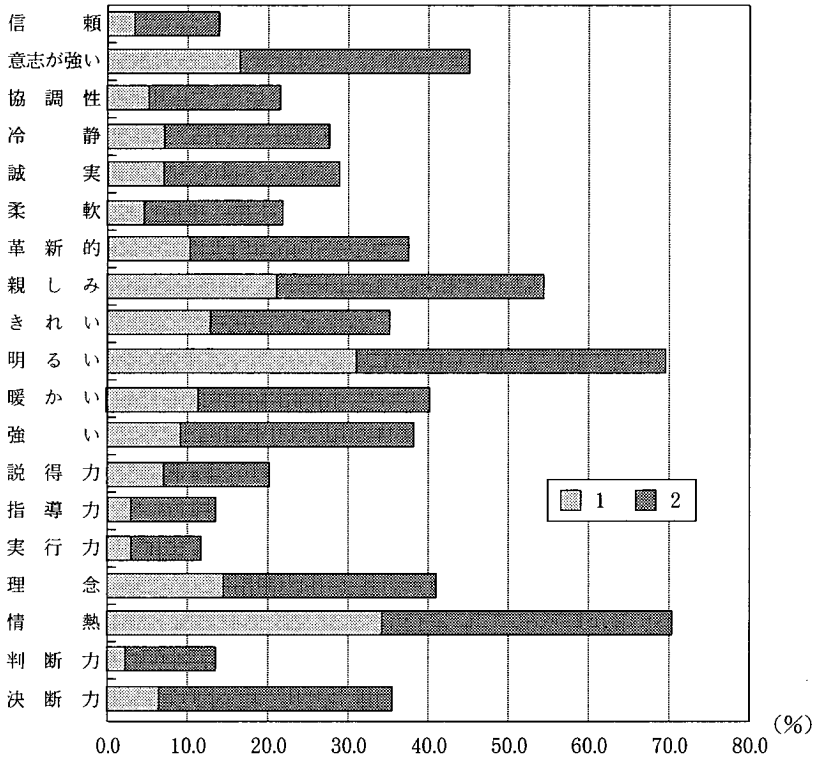
冷静—冷静でない

協調性がある—協調性がない

意志が強い—意志が弱い

信頼できる—信頼できない

図2 小泉イメージ



ここで評価的イメージと人格的イメージとに大別したが、評価的イメージに比して人格的イメージはより感情的要素が多いイメージ項目といえる。

それでは、小泉首相に対して学生たちはどのようなイメージを抱いているのであろうか。単純集計結果を図2に示す。1または2と回答した者が比較的高い比率を示す項目は、「情熱がある」「明るい」「親しみがある」であり、小泉首相に対してこれらのイメージが広くもたれているといえる。それに対して、「実行力がある」「信頼できる」「指導力がある」「判断力がある」「協調性がある」という項目で比較的数値が低い。「信頼できる」が低い比率を



表7 政治的関心項目と内閣支持・小泉好感度・小泉イメージとの相関

|       | 政治関心   | 友人会話   | メディア接触 | 政治知識  |
|-------|--------|--------|--------|-------|
| 内閣支持  | .061   | .069   | -.014  | .004  |
| 小泉好感度 | .096*  | .069   | -.022  | .035  |
| 決断力   | .070   | .099*  | .063   | .028  |
| 判断    | .006   | .082*  | .005   | .009  |
| 情熱    | .068   | .058   | .002   | -.067 |
| 理念    | .145** | .129** | .114** | .016  |
| 実行力   | .043   | .124** | .010   | .017  |
| 指導力   | .068   | .101*  | -.007  | -.017 |
| 説得力   | .041   | .086*  | .022   | .026  |
| 強い    | .110** | .118** | .045   | .037  |
| 暖かい   | -.023  | .005   | -.023  | -.038 |
| 明るい   | .064   | .066   | .057   | .011  |
| きれいな  | .112** | .038   | .117** | .042  |
| 親しみ   | .051   | .074   | .009   | .001  |
| 革新的   | .163   | .106** | .038   | .018  |
| 柔軟    | -.020  | .041   | -.087* | -.008 |
| 誠実    | .038   | .057   | .024   | -.029 |
| 冷静    | -.083* | -.037  | -.080* | -.008 |
| 協調性   | -.079* | -.069  | -.102* | -.041 |
| 意志強   | .031   | .051   | .018   | .004  |
| 信頼    | .040   | .064   | -.052  | .003  |

\*\*  $p < 0.01$  \*  $p < 0.05$

示すのは、2002年1月に小泉首相が突如、小泉政権生みの親といわれた田中真紀子外相を更迭したことも影響していると推測される。

小泉首相に対する感情面での態度を表す小泉好感度と、主として評価的な態度と考えられる小泉内閣支持・不支持の態度とは、密接な関係にある。小泉好感度と内閣支持との相関係数は.733であり、強い相関関係が認められる。これら2つの態度の強い相関は橋本内閣のときにも認められており、内閣支持・不支持の態度と首相好感度とは一般に極めて近い変数であると考え

てよい。<sup>(11)</sup>

さきに、政治的関心について考察を加えたが、内閣支持や小泉好感度に関しては、関心度と相関関係が存在するのであろうか。また関心度の高低によって小泉イメージに違いがあるのであろうか。そこで、政治関心、友人との政治的会話の頻度、メディアでの政治情報接触、政治知識とこれらとの相関分析を行った。結果を表7に示す。サンプル数が600を超えているため、有意水準をパスした組み合わせはいくつか存在するものの、いずれの組み合わせにおいても相関係数の絶対値は0.2を下回っている。したがって、政治的関心項目と内閣支持や小泉好感度、小泉イメージとの相関関係はほとんど存在しないことがわかる。なかでも、政治知識に関しては有意水準をパスした項目が皆無である。

### 1. 小泉イメージの構造

それでは、小泉イメージはどのような要素から構成されているのであろうか。ここではまず、イメージ項目間の相関係数から検討する。小泉イメージ項目間の相関分析結果を表8に示す。表8では相関係数が0.4以上の組み合わせには外枠をつけた。相関係数が高い順にいくつかの組み合わせを挙げると、「決断力」―「実行力」(.495)、「親しみ」―「暖かい」(.481)、「誠実」―「親しみ」(.479)、「指導力」―「実行力」(.477)、「判断力」―「信頼」(.472)、「指導力」―「信頼」(.468)、「誠実」―「信頼」(.462)、「理念」―「情熱」(.460)がある。「決断力」、「実行力」、「判断力」といった政治的手腕に関するイメージ相互間の相関関係が高く、他方、「親しみ」、「暖かい」、「誠実」といった人格的イメージ相互間も比較的高い相関関係が認められる。

続いて、イメージ項目を変数として投入し、因子分析(主因子法)を行うことによって小泉イメージの構造を検討したい。表9は、イメージ項目の因子分析結果を示す。固有値1.0以上で次の4つの因子が抽出された。

表8 イメージ項目間の相関関係

|      | 決断力  | 判断   | 情熱   | 理念   | 実行力  | 指導力  | 説得力  | 強い   | 暖かい  | 明るい  | きれいな | 親しみ  | 革新的   | 柔軟   | 誠実   | 冷静   | 協調性  | 意志強  | 信頼 |  |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|----|--|
| 決断力  |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 判断   | .402 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 情熱   | .285 | .240 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 理念   | .360 | .374 | .460 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 実行力  | .495 | .365 | .181 | .291 |      |      |      |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 指導力  | .323 | .373 | .244 | .354 | .477 |      |      |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 説得力  | .276 | .377 | .304 | .374 | .287 | .531 |      |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 強い   | .362 | .355 | .378 | .341 | .294 | .368 | .339 |      |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 暖かい  | .175 | .257 | .309 | .208 | .203 | .241 | .262 | .208 |      |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 明るい  | .142 | .137 | .369 | .155 | .115 | .087 | .186 | .185 | .441 |      |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| きれいな | .164 | .171 | .241 | .241 | .129 | .190 | .194 | .148 | .317 | .339 |      |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 親しみ  | .241 | .294 | .407 | .375 | .227 | .309 | .419 | .314 | .481 | .384 | .345 |      |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 革新的  | .365 | .251 | .359 | .400 | .319 | .300 | .269 | .342 | .171 | .098 | .182 | .364 |       |      |      |      |      |      |    |  |
| 柔軟   | .148 | .286 | .143 | .197 | .204 | .256 | .227 | .125 | .257 | .133 | .147 | .301 | .310  |      |      |      |      |      |    |  |
| 誠実   | .208 | .305 | .396 | .386 | .189 | .324 | .311 | .278 | .353 | .189 | .298 | .479 | .327  | .295 |      |      |      |      |    |  |
| 冷静   | .064 | .252 | .072 | .168 | .109 | .232 | .236 | .197 | .107 | .043 | .224 | .153 | .061  | .223 | .288 |      |      |      |    |  |
| 協調性  | .089 | .207 | .082 | .064 | .090 | .161 | .114 | .044 | .242 | .115 | .174 | .158 | -.018 | .248 | .173 | .306 |      |      |    |  |
| 意志強  | .316 | .291 | .351 | .380 | .255 | .299 | .325 | .387 | .099 | .174 | .194 | .277 | .345  | .089 | .304 | .178 | .052 |      |    |  |
| 信頼   | .370 | .472 | .322 | .371 | .395 | .468 | .448 | .337 | .316 | .132 | .256 | .447 | .393  | .321 | .462 | .257 | .201 | .445 |    |  |

青年期の政治意識に関する研究

表9 小泉イメージの因子構造 (主因子法, バリマックス回転)

|       | 因 子   |      |       |       |
|-------|-------|------|-------|-------|
|       | 1     | 2    | 3     | 4     |
| 決 断 力 | .327  | .563 | .103  | .007  |
| 判 断 力 | .300  | .423 | .105  | .332  |
| 情 熱   | .577  | .083 | .396  | -.012 |
| 理 念   | .582  | .238 | .150  | .121  |
| 実 行 力 | .163  | .727 | .080  | .071  |
| 指 導 力 | .320  | .502 | .072  | .320  |
| 説 得 力 | .381  | .331 | .162  | .301  |
| 強 い   | .496  | .295 | .122  | .097  |
| 暖 か い | .058  | .176 | .678  | .237  |
| 明 る い | .126  | .033 | .647  | -.008 |
| き れ い | .197  | .048 | .392  | .234  |
| 親 し み | .397  | .149 | .533  | .246  |
| 革 新 的 | .513  | .297 | .118  | .043  |
| 柔 軟   | .122  | .187 | .185  | .392  |
| 誠 実   | .462  | .058 | .290  | .386  |
| 冷 静   | .153  | .024 | -.010 | .570  |
| 協 調 性 | -.076 | .068 | .179  | .485  |
| 意 志 強 | .562  | .207 | .053  | .108  |
| 信 頼   | .445  | .391 | .156  | .399  |

第1因子に関しては、「理念がある」「情熱がある」「意志が強い」「強い」「革新的」の因子負荷量が高い値を示すのに対して、「協調性」「柔軟」が低いことから「改革者の因子」と名づけることができる。

第2因子は、「実行力がある」「決断力がある」「指導力がある」が高い因子負荷量を示し、「明るい」「冷静」などが低いことから、「強いリーダーシップの因子」といえる。

第3因子は「暖かい」「明るい」「親しみがもてる」が高い値を示し、「冷静」「意志が強い」などが低い値を示すことから、「親しみ感の因子」といえる。

第4因子は「冷静である」「協調性がある」が高い値を示し、「明るい」「決断力」「情熱」が低い値を示す。これは「冷静さと協調性の因子」といえる。

このうち、第1因子と第2因子に関しては、小泉首相は郵政民営化を始めとする「構造改革」を前面に打ち出したことや、敗北した98年総裁選挙において田中真紀子議員が「変人」と命名したことも影響していると想定される。第3因子に関しては、オペラ観賞や音楽鑑賞を趣味とするなど、メディアを通じた趣味人としてのアピールやメール・マガジンの開設なども影響しているのではなかろうか。

## 2. 内閣支持・小泉好感度と小泉イメージ

それでは、内閣支持や小泉好感度は、どのようなイメージ項目と関連性が強いのであろうか。そこで、小泉イメージ項目および因子得点と内閣支持・小泉好感度との相関分析を行った。分析結果を表10に示す。内閣支持率との相関係数が0.4以上を示すイメージ項目は、「信頼」(.627)、「判断力」(.499)、「親しみ」(.469)、「説得力」(.450)、「理念」(.424)、「実行力」(.403)の6項目である。6項目中4項目が、評価的イメージ項目であり、内閣支持という態度が評価的態度であることと関係している。それ以外のイメージ項目はいずれも0.4を下回り、弱い相関関係しか認められない。2001年1月に、小泉首相と同じく国民の人気が高かった田中真紀子外相を更迭し、支持率が大幅に低下したが、イメージとしてはこの信頼—不信イメージに傷をつけたものと推測される。また、因子得点との相関係数は、第1因子（改革者の因子）と第2因子（親しみ感の因子）が比較的高く、第3因子（強いリーダーシップの因子）が比較的低い。メディアを通して「改革なくして景気回復（成長）なし」という言葉を繰り返し、夏休みには息子とキャッチボールをする光景をメディアに公開するといった小泉首相のイメージ戦略は、この分

青年期の政治意識に関する研究

表 10 イメージ項目および因子得点と内閣支持・小泉好感度との相関関係

|             | 内閣支持 | 小泉好感 |
|-------------|------|------|
| 決 断 力       | .384 | .358 |
| 判 断 断       | .499 | .456 |
| 情 熱         | .341 | .399 |
| 理 念         | .424 | .401 |
| 実 行 力       | .403 | .339 |
| 指 導 力       | .383 | .401 |
| 説 得 力       | .450 | .465 |
| 強 い         | .319 | .397 |
| 暖 か い       | .358 | .415 |
| 明 る い       | .222 | .244 |
| き れ い       | .227 | .285 |
| 親 し み       | .469 | .605 |
| 革 新 的       | .386 | .407 |
| 柔 軟         | .318 | .311 |
| 誠 実         | .399 | .473 |
| 冷 静         | .176 | .194 |
| 協 調 性       | .203 | .174 |
| 意 志 強       | .321 | .326 |
| 信 頼         | .627 | .641 |
| 第 1 因 子 得 点 | .458 | .518 |
| 第 2 因 子 得 点 | .447 | .374 |
| 第 3 因 子 得 点 | .301 | .387 |
| 第 4 因 子 得 点 | .356 | .375 |

(注) すべて1%水準で有意。

析結果からすると功を奏したようにみえる。

小泉好感度と小泉イメージとの相関関係に関してみると、内閣支持に比して人格的イメージとの相関関係がやや高まる傾向にある。なかでも、「信頼」と「親しみ」が0.6を超えており、比較的強い相関が認められ、その他、「判断力」「理念」「指導力」「説得力」「暖かい」「革新的」「誠実」が0.4を超えており、ある程度の相関が認められる。また、因子得点との相関係数は、

表 11 内閣支持・小泉好感度を従属変数とした重回帰分析

| 従属変数          | 内閣支持   | 小泉好感度  |
|---------------|--------|--------|
|               | 非標準化係数 | 非標準化係数 |
| 決 断 力         | .037   | .025   |
| 判 断 力         | .208** | .109** |
| 情 熱 念         | .032   | .063   |
| 理 念 力         | .109** | .009   |
| 実 行 力         | .115*  | .014   |
| 指 導 力         | -.086  | -.020  |
| 説 得 力         | .142** | .098** |
| 強 い           | -.021  | .079*  |
| 暖 か い         | .067   | .073*  |
| 明 る い         | .046   | -.027  |
| き れ い         | -.030  | .022   |
| 親 し み         | .111*  | .272** |
| 革 新 的         | .080   | .067   |
| 柔 軟           | .045   | .004   |
| 誠 実           | .028   | .072   |
| 冷 静           | -.049  | -.025  |
| 協 調 性         | .055   | .006   |
| 意 志 強         | -.040  | -.053  |
| 信 頼           | .459** | .365** |
| 調 整 済 み $R^2$ | .515   | .576   |

\*\*  $p < 0.01$  \*  $p < 0.05$ 

第1因子（改革者の因子）が.518と群を抜いて高い。小泉首相が繰り返し「改革」という言葉を国民に向けて発することは高い好感度を維持する効果があるといえそうだ。

さきに表8に示したようにイメージ項目相互間で相関関係が認められる。そこで、いずれのイメージ項目が内閣支持や小泉好感度を規定するのかを更に考察するために重回帰分析を行った。結果を表11に示す。内閣支持に関しては、有意水準をパスした変数は6個あり、そのうち4変数が評価的イメー

ジ項目である。「信頼」「判断力」「説得力」の順に非標準化係数の値が高く、これらのイメージ項目の規定力が比較的高いことがわかる。小泉好感度に関しても有意水準をパスした変数は6個存在したが、そのうち4変数が人格的イメージに関する項目である。内閣支持という評価的態度に関しては評価的イメージが、小泉好感度という感情的態度に関しては人格的イメージが規定要因の多数を占めている。また、小泉好感度の規定要因としては「信頼」「親しみ」が高い値を示すことからこれらのイメージの重要性を指摘することができる。

以上、内閣支持・不支持の規定要因および小泉好感度の規定要因を検討したが、これら2つの態度を規定する最も重要な変数は「信頼できる—信頼できない」というイメージ項目であった。考えてみれば、国民が政治家に対して言及する時「信頼できない」という言葉が頻繁にきかれる。信頼—不信イメージの重要性は青年に特有のことというよりも、国民全体にとっても重要な変数といえるのではなかろうか。したがって、政治リーダーの信頼度が何によって規定されているのかという問題意識に基づいた更なる考察が必要とされよう。

### 3. 結 論

これまで、大学生の小泉首相イメージに関する分析を行ってきた。分析の結果から導くことができる結論は以下のとおりである。

- ① 小泉イメージに関しては、「改革者の因子」「親しみ感の因子」「強いリーダーシップの因子」「冷静さと協調性の因子」が抽出された。
- ② 内閣支持・不支持の態度とイメージ項目との関係を検討すると、「信頼」と「判断力」が比較的高い相関を示している。
- ③ 小泉好感度とイメージ項目との相関関係を検討すると、「信頼」と「親しみ」が比較的高い相関を示す。



- ④ これらの分析結果から小泉首相イメージ項目の中で重要度が高いのは「信頼」「判断力」「親しみ」の3項目であり、これら3つのイメージの変化が青年層における内閣支持率の変動につながりやすいと推測される。

## 《注》

- (1) 例えば、田中愛治「青年層の政治意識と投票行動」『青少年問題』39(7), 1992年, 12~20ページ。
- (2) M. P. Wattenberg. *Where Have All the Voters Gone?* (Harvard University Press, 2002), p.85. なお、比較検討された10カ国(アメリカ, イギリス, ドイツ, スペイン, オーストラリア, ニュージーランド, ノルウェー, オランダ, スイス, 日本)ではいずれも若年層の投票率は老年層よりも低かったが、その差が最も大きい日本は37ポイント差であり、差の最も小さい国は強制投票制を採用しているオーストラリアで2ポイント差であった。
- (3) 古典的研究として、F. I. Greenstein, *Children and Politics*, Revised Edition (New Haven and London: Yale University Press, 1969)が挙げられる。わが国における政治的社会化に関する先駆的研究は、岡村忠夫による小学生から高校生までを対象とした調査研究である。「現代日本における政治的社会化—政治意識の培養と政治家像—」『年報政治学』1970年, 岩波書店, 1~67ページ。なお、アメリカでは、政治意識という用語ではなく、政治的態度という用語が一般に用いられている。
- (4) M. K. Jennings and R. G. Niemi, *Generations and Politics: Panel Study of Young Adults and Their Parents* (Princeton N. J.: Princeton University Press, 1981). なお、政治的社会化研究の動向に関するわが国におけるレビュー論文として、広瀬弘忠「転機にきた政治的社会化研究—その再検討と新たなる枠組の設定にむけて」『東京女子大学紀要「論集」』第32巻第1号, 1981年, 119-157ページ, および河田潤一「政治的社会化」河田・荒木義修編『ハンドブック政治心理学』北樹出版, 2003年, 第3章, を挙げておく。
- (5) 心理学者による研究としては、例えば、原田唯司「青年期における政治的態度に関する一研究」『教育心理学研究』第30巻第1号, 1982年, 12~20ページ, 久世敏雄編著『青年期の社会的態度』福村出版, 1989年。
- (6) 18歳選挙権に関する論考として、井田正道「18歳選挙権に関する考察」『政経論叢』(明治大学)第71巻第3・4号, 2003年, 141~165ページ。なお、ここでは若年層を20歳代, 青年層を10歳代後半~20歳代前半とする。
- (7) 大学生の中には有権者年齢に達していない者も多い上に、有権者であっても

投票率が低く、選挙結果や世論調査に及ぼす影響は少ない。しかし、高等教育の進学率が5割を超えている今日では、有権者年齢に達する前後の若者の多くが学生という身分にあることを考えると、政治的社会化研究の見地からしても、大学生は決して特殊な集団ではない。加えて、アメリカなどは異なり、わが国では学歴の高低が投票参加率に及ぼす影響は少ないことが判明しており、学生層と勤労青年など他の青年との政治関与の違いはさほどみられない。したがって、大学時代が勤労青年や無職の青年とは隔絶された社会化プロセスにあるとも想定できない。

- (8) 直井道子「政治的社会化過程における集団の役割」『社会学評論』22-3, 1972年, 17~29ページ。同「政治的社会化過程における集団の役割(2)」『社会学評論』23-1, 1972年, 53~67ページ。直井は政治関心を「個人の政治的対象に対するかかわりあい」として広義に捉え、政治関心の構成要素として「政治的興味」「投票行動(参加)」「政治的コミュニケーション行動」「政治的有効性感覚」「政治参加義務感」の5つを挙げた。
- (9) 政党支持態度の形成に関する研究としては、例えば岩瀬庸理「政党支持態度の形成と家族の役割」『評論 社会科学』(同志社大学)第12号, 1977年, 15~48ページ。
- (10) 政治的有効感に関する質問文は、1973年から定期的に行われているNHK世論調査の質問文を参考として、「選挙で一票を投じることは国の政治にどの程度影響を及ぼしているとお考えですか。強い影響を及ぼしているとお考えの場合は1を、まったく影響を及ぼしていないとお考えの場合は5としてお答えください」とした。NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造〈第5版〉』日本放送出版協会, 2000年。
- (11) 井田正道, 「有権者の党首態度に関する計量分析」『政経論叢』(明治大学)第68巻第2・3号, 1999年, 163~185ページ。